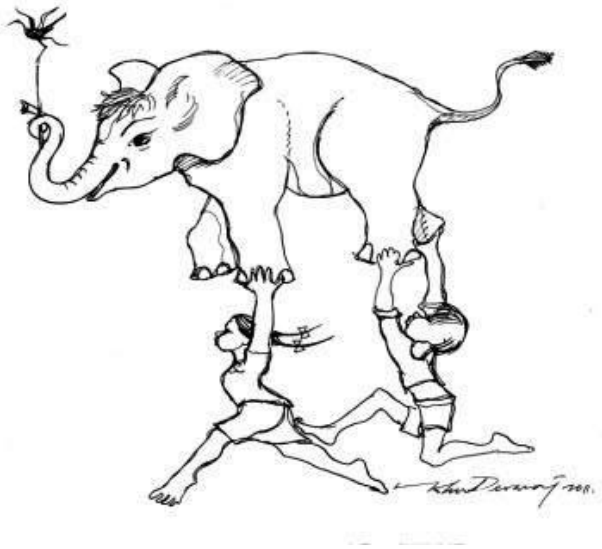


「平和ぞうれっしゃ」

平和をつくりだすのは
私たち

ボーンフリーアートスクール

2011 年招聘事業報告書

目次

はじめに（Ｐ２）

平和とアートと子どもたち～招聘から学んだもの（ｐ５）

会計（ｐ１５）

謝意（ｐ１０）

ボーンフリーアートスクールの活動（ｐ１２）

活動歴（ｐ１２）

会計報告詳細（ｐ１５）

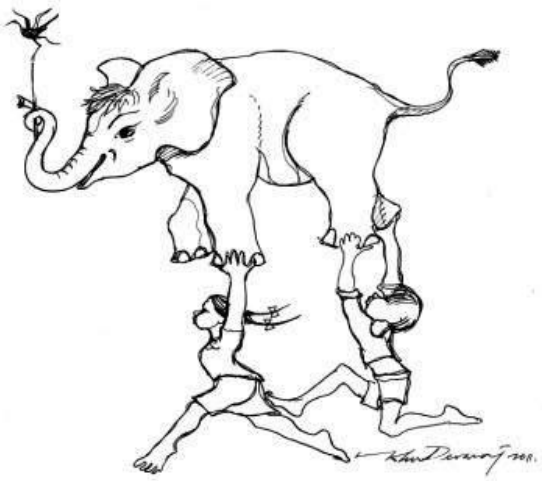
スケジュール詳細（ｐ１７）

来日者プロフィール（ｐ１９）

ピースミュージアム設立に向けて（ｐ２２）

「平和ぞうれっしゃ」ツアー

はじめに



家族、愛する人、友人、ペットなど自分の身の回りに大切な人がいて、心が落ち着き暮らす。そんな当たり前の「平和」が無残にも壊れる。晴天の霹靂として日本を襲ったのは東日本大震災。そして立て続けに起こった悪夢の福島大原発事故であった。世界で唯一被爆国日本が半世紀以上経った今、また「ヒバク」を口にしている。

日本から6000キロメートル離れたアジアの新経済大国インドにも驚愕させられる事故映像として「フクシマ」が知られるようになった。そのインドで、働く子どもたち、ストリートチルドレンのために芸術を通して教育の大切さ、尊厳を回復し自立していく意味を教える学校、ボーンフリーアートスクール（英語名：Bornfree Art School）がある。ボーンフリーでは音楽、ダンス、絵画、彫刻、映画制作、演劇など芸術活動を「セラピー」として捉え、自分の中に潜む力に気づくこと、それを表に出すことで豊かな感情表現ができるようになること、また心の傷やトラウマから脱出することなどを目指す。また子どもたちが今だ労働に苦しむ子どもたちを現場や路上から解放することも彼らの全うすべき使命としている。長年このような活動をしている中で、一つは文化的変化、つまり、社会における個人が「子どもを雇うことは“犯罪”だ」という意識変化を持つこと、もう一つは国家構造的変化が必要だと理解するに至ってきた。国家構造的変化とは。それは、一言でまとめると国が軍事ではなく福祉に重きを置くことだ。福祉国家と言われると北欧の国を思い浮かべるが、別の意味での福祉国家とは、軍や武器を捨てた非戦闘国家のことを指すかもしれない。それを代表するのがコスタリカである。銃を捨て、鉛筆を子どもたちに持たせた国。インドでは、2011 年で年間の軍事費が前年より 11.59％増加の1兆 6400 億ルピー（およそ 360 億ドル）に上り、また核保有国としても言わずと知れている。教育費は 4200 億ルピー（およそ 91 億ドル）であり、軍事費の３分の1弱である。３億以上の子どもたちが学校へ行けていない、つまりインド人の２人に１人は読み書きが出来てない状況がある一方、国内情勢は不安定で、周辺国との歪み合いも続き常に緊張が走る国だ。

そのような社会的、経済的、文化的要素から、ボーンフリーの代表であるジョン・デバラジは「銃よりもペンを」と訴えてきた。具体的には、核開発や原子力発電所の建設を推進するのではなく、教育の権利を保証し、子どもたちが労働から解放されること、そのためにはヒバク国日本からヒロシマ・ナガサキのヒバクシャの声をインドに届けること、マハトマ・ガンジーが唱えた「非暴力」を実践する国にすることなどをインドの子どもや若者に伝えて行くことが使命だと考える。ボーンフリーでは、

2008 年より「白い花」と題した原爆劇を全国で、またインドとパキスタンの子どもたちの平和友好を訴える自転車平和ラリー、ピースバイシクルなどを行なってきた。また私たちはインドの子どもたちがパキスタンの子どもたちに向けて書いた 7000 通の平和メッセージを集めた。今年は、ボーンフリーはかねてから実現したかった夢の演劇「平和ぞうれっしゃ」の公演に取り組んでいる。

「平和ぞうれっしゃ」ツアー

「平和ぞうれっしゃ」（原題；Heiwa Zou Resha）は小出隆司氏原作「ぞうれっしゃがやってきた」をベースにしたミュージカルである。2009 年に名古屋の「愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団」の女性 3 名から、平和、子ども、そして環境という主に三つの重要なテーマを含んだ「ぞうれっしゃ」の物語を聞き、インドでの公演実現を長年望んでいた。2010 年 10 月ごろより、デバラジが脚本作りに本格的にドイツで取り組み始めた。11 月半ばには名古屋から訪れた 5 名の方により、歴史的経緯やコンセプトに関しての意見交換や修正が行われ、また二日間で 25 曲をデバラジが仕上げる、という作業があった。その中で重要だったのは、愛知の合唱団が 10 年以上に渡って続けてこられた「ぞうれっしゃよはしれ」の曲の中で4曲をインドでも採用し、日本とインドのコラボレーションを試みることであった。基本の音ができるとすぐに若手中心のミュージシャンが続々と集まり、12 月半ばにレコーディングに入った。総勢 30 名は集まったであろう、平和をテーマにした音楽作りに日中励んだ。誕生したのは「平和ぞうれっしゃ」。2011 年に入り、振付が始まり、子どもたちへの音楽、ダンス、機械体操などのトレーニングが行われ始めた。同時に資金調達のため企業の CSR（社会貢献）部門へのアプローチも行われた。

5 月に入り、日本での日本語による「平和ぞうれっしゃ」の音楽レコーディングが名古屋で行われた。子どもたちもソロを歌ったり、と数多い歌とナレーションがこなされた。日本語版 CD なくして日本での「平和ぞうれっしゃ」ツアーは成り立たなかったと思い起こす。

ツアーは約1年前より企画された。各地で、と言っても広島、名古屋そして東京の 3 都市でまず話し合いが行われ、それぞれの地域で実行委員会として、或は個人として企画が進められていく。一つは招聘に向けて1年間キャンペーンとして、各地で上映会やワークショップなどのプレイベントが行われた。また一方で一年間の準備の中で上記の都市以外に、福岡、長崎、大阪が加わり、結局、招聘は 6 都市で行われることとなったのである。本報告書は各地での詳細な報告が行われると思うが、以下は総合的にボーンフリーアートスクールとしてこの招聘事業で何を学んだか、ということに焦点を当てて報告を行いたい。なお、今回の来日者は、代表ジョン・デバラジ、共同代表中山実生、サルワナ・ダナパール、ラマチャンドラ・スダルヤンディ、ピア・バングロワラ、アナン・ダナコティの以上6名である。それぞれのプロフィールは本報告書の最後に添付しておきたい。

「平和ぞうれっしゃ」～あらすじ

時は戦時中、日本が太平洋戦争に向けて邁進し出したころ。爆弾投下が激しくなり本格的に日本が空襲を受け始め、木下サーカスではこれ以上ぞうを守れないと判断し、名古屋の東山動物園に芸の長けた 4 頭のぞうが送られる。一方で日本軍の命令により、動物園にいる猛獣な動物を殺

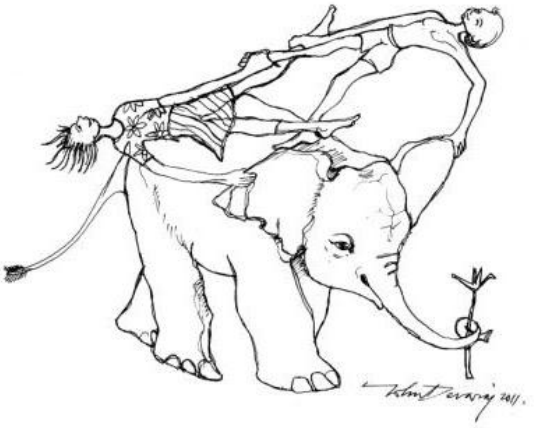
す命令が下される。クマやライオンが次々に殺されていき、残ったのはやせ細ったぞうとチンパンジーだけであった。やがて動物園は軍馬の駐屯地となる。園長の北王はぞうの命を守るため、こっそり軍馬の草を抜き取りぞうに与える。やがて日本は広島・長崎の原爆投下により終戦を迎えた。

戦後の民主化政策により子ども国会がつくられ、東京では子どもたちが真剣に動物について話し合いをしている。上野動物園にはぞうが1頭もいないので、子どもたちが名古屋にでかけて「ぞうを下さい」と訴える。しかし、ぞうを貸すことができないとわかり子どもたちはがっかり。そのニュースを聞きつけた国鉄は、子どもたちのぞうが見たいという夢をかなえるため列車「ぞうれっしゃ」を出すことにした。

しかし、東京の子どもたちは見るだけでは十分満足できず、何とかぞうを上野動物園に、と国会へ請願書を出したのである。その請願書が当時のインドのジャワハルラール・ネルー首相のもとへ届いた。ネルー首相は「インドはぞうの国だから、私が小象『インディラ』を贈ろう」と言う。

同じ時、広島では白血病で苦しむサダコが折鶴を折り、生きる望みをかけている。子どもたちはサダコの折った鶴を一羽一羽拾い、「お母さん、水・・・」と息途絶えるサダコのもとに近づく。

インドでは、シャンティがインディラに乗り、日本へ向かおうとしている。そこで、アマンという男の子に会う。「君はどこから来たの？」「パキスタン」。シャンティはアマンと一緒にインディラに乗って日本へ行こうと言う。アマンは「どうやって日本への道を見つけるの？」と聞くと、「簡単だよ。ほらここにある折鶴が飛ぶ方向に向かって行けば日本にたどり着くよ」とサダコの折った鶴を手に持つ。アジアを旅するインディラは、各地のアジアの子どもたちと一緒に日本へやっていく。



平和とアートと子どもたち～招聘から学んだもの

招聘を通して、以下の三点から述べたい。この旅が1）平和を学ぶ旅、2）アートセラピーの実践、3）子ども・若者へのエンパワーメントであったと言えるであろう。

１．平和を学ぶ旅

最初の平和を学ぶ旅、というのは言うまでもなく、今回かねてから私個人の長年の夢であった、アーティストとしてヒロシマ・ナガサキの原爆の日に集う、ということであった。ハチロク（8・6）に広島の大地に立つ、そのようなことがとても神聖な気持ちに私たちをさせたのは言うまでもなかった。8月6日の朝はいつよりも早く起き、7時には平和公園の近くに私たちはいた。子どもたちがボランティアで献花用の花やプログラムを配っているのがとても印象的だった。ボーンフリーのメンバーは原水爆禁止世界大会実行委員会の計らいにより海外代表の席に座ることができた。8時から厳かに

始まった平和式典は 8 時 15 分という原爆が落ちた瞬間一斉の静寂がその場を支配し、私たちは66年も経ったことを実感するには時間がかかった。デバラジはその日のことを「何万という人が灰に消え苦しんで亡くなっていったことを想像しました。そこに集うたくさんのヒバクシャの方の表情、核ホロコーストの傷と残したものを見ることができました。」と述べている。今年の広島市の平和宣言は、原発の問題が深刻さを増している故に期待される発言が新しい市長からなされるかと希望を抱いていたが、それは見事に裏切られた感が残った。その日は 8･6 国民平和大行進に参加し、“デモ”を経験、彼らの集会で急遽パフォーマンスをすることとなった。そこで私たちは、「ノー、ノー、ノットアゲィン、ヒロシマノットアゲィン、フクシマノットアゲイン」の大合唱を生みだした。その後、グリーンアリーナで開催された原水禁世界平和大会に出場、初めてヒバクシャの語る姿を見た。85 才のその男性は「死ぬまで核廃絶を訴える」と高らかに言い切ったその言動はエネルギーに満ち溢れていて、真の平和リーダーだと感じた。その後、灯籠作りに私たちは没頭した。最初はあまり乗り気でなかったメンバーも最後には自分それぞれの灯籠作りを完成させ、それを片手に持ち、日が落ち出した平和公園へ歩み出した。元安川に流れている色とりどりの灯籠を見た瞬間、インドの人の表情は変わった。その灯籠流しに込められたたくさんの人の平安への祈りと新しい平和な世界への誓い。灯籠をずっと見続けた私たちだった。その後、佐々木禎子像の前で平和賛歌を歌い続けた。沢山の人に囲まれ、彼らと一体になりながらハチロクの最後を飾った時間であった。

ハチロクの前には、私たちは三登浩成氏にピースガイドをして頂いた。この方は 2006 年より11万5千人以上、135ヶ国以上の国の人に案内をしてきたヒバク二世の平和大使だ。また、広島平和資料館の理事長スティーブ・リーパー氏にもお会いし、会合を持つことができた。その中で新しいアイデアとして浮かんだのが、「ピーススタディーズ（平和学）」である。これをインドの若者に導入すること。インドからヒロシマへ平和学を学ぶ若者を送ること。インドでは平和学と呼べる授業は皆無に等しく、しかし早急に必要としている科目ではないかと思う。小さい頃に戦争の歴史を知り、現在の社会情勢に敏感であるには平和学は必須であろう。ボーンフリーから将来平和学を学ぶ若い人を送ることができ、彼らがインドに帰ったときに新しい平和大使として活躍できることを期待することができるかもしれない。

ヒロシマからナガサキへ。8 月 9 日に向けて私たちは出発。港町であり、山々に囲まれた小さな南の玄関口。ナガサキは他の町と何か違う風情を持っているのを到着した日から感じた。ナガサキで「一本柱」として有名な被爆した鳥居の近くに被爆したクスノキの木があることを知り、それを見上げたとき自然の強さを思い知らされた。爆風で飛んだ瓦やガラスの破片がクスノキの中に何十年も眠り、後世の人により発見されたとのこと。被爆しても葉を生い茂らせたこのクスノキの木。大地の偉大さと人間の愚かさ、その対比を我々はそこではっきり知らされるであろう。そこの住人とも言うべき、被爆証言をして下さると言った森田博満氏。初めて“ヒバクシャ”と呼ばれる方を目の前にして被爆体験を聞くインド人。飛行機からファットマンが落ちるのを見ていたという森田氏。66 年前の大量殺戮を語る彼の勇気に感謝であった。

長崎の平和資料館では分かりやすく展示がされており、私たちは閲覧するのに3時間ぐらい時間を費やしたであろう。長崎市が行う平和式典は広島の私にはとても新鮮で驚きであった。それは

高校生が司会をしたこと、被爆者の方への国の支援と原発廃止というのを真っ向から訴えていた堂々とした市長の揺るぎない平和宣言であった。それにとても心打たれ、ナガサキに非常に親しみを持つことができた。

大阪では「ピース大阪」といわれる戦争展示館に案内された。日本の戦略について、加害について、空襲から原爆、そしてホロコーストまで扱った範囲の広い平和資料館であった。名古屋でも「戦争に反対する平和展」に陳列されたベトナム戦争、イラク戦争、アフガニスタンの戦争など現代戦争の展示がなされていた。興味深く私たちはこれらを丁寧に見て回った。そこで初めて、デバラジのアイデアが固まった。「インドにこのような平和資料館を建てたい」という思いである。ガンジーの偉業を唱えたり、イギリスからの独立を讃えた資料館は全国にあるだろう。しかし、戦争の歴史を語った平和資料館はゼロに限りなく近いと言える。一方で、早急にインドの若者に平和を学ぶ場は必要だ。非暴力を唱えたマハトマ・ガンジーを生み出した国であるが、暴力が横行する、核保有の軍事大国だからだ。なぜパキスタンと、中国と睨みあわなければならないのか？その疑問を若い人に子どもたちに生ませるために平和資料館は必要だ、とデバラジは直感した。今回のツアーでこの結論にたどり着いたのもこのような平和学習の機会が与えられたからであろう。今帰国したデバラジの中で「シャンティミュージアム（平和資料館）」の構想が出来上がりつつある。

パフォーマンスにおいても、平和と戦争の歴史を理解せずして良いものには成り得なかった。特にデバラジが表現したかったのは原爆、サダコ、そして憲法 9 条。インドではなく、この日本で新たに生まれた憲法 9 条を祝う「憲法 9 条ソング」は、長崎の平和公園に立つ彫刻のイメージを見た時彫刻家としてのデバラジの心に響くものがあった。彫刻が空を力強く指すイメージをこのシーンで採用し、最後の地である東京では完璧な完成版として出来上がったと思う。東京では若者がずらりと並び、憲法9条を歌う、きっと今の日本では信じ難い光景ではないかとその時に感じた。ヒップホップ調に踊る者から、ロッキングスタイルで踊る者、日本の若者が「3度目の原爆を落とさせない、憲法9条！」と叫ぶのを見たら全国で頑張っている平和活動家は勇気づけられるのではないだろうか。

２．アートセラピーの実践

今回のツアーでは各地で子どもや若者たちを対象にワークショップを行なった。広島では小学生 40 人を対象に二日に渡るワークショップを行う。子どもたちはすぐにインドの人に打ち解け、遊ぶのに夢中になっていた。子どもたちだけでなく、付き添いで来ていた母親たちも混じり心を解放して一緒になって体を動かした。福岡では、少年少女みなみの子どもたちで、ダンスや音楽にとても長けているメンバーに出会った。彼らを率いるのはプロのピアニストである久保山摘美氏。彼女はピアノも弾きながら幼少の頃からのバレエのトレーニングを活かし、振付を子どもたちにやっている若い女性だった。原爆のシーンを歌う「ノーノットアゲィン（もう二度と）」ではソロで歌った緒方健太君も印象に残っている。

名古屋では「子どもの幸せと平和を願う合唱団」の子どもたち 15 人とおとなを対象に約 2 時間の演劇ワークショップを行なった。彼らの歌う姿にはまちまちで体いっぱいで表現している子もいれば

非常に無表情な子どもたちもいた。デバラジによるアイスブレーキングはなんだか唐突な気がするアメリカの先住民族の踊りから始まるのだがなぜかそれはエネルギーを高め打ち込みやすいものがあった。お互いがペアになって相手の動きを真似するミラーエクセサイズ、一人は目をつぶり相手方に引かれていくトラストゲームなど、どのゲームやエクセサイズでも心を解放し、自分がおとなだったら子どもに戻るぐらい楽しむことができる。どの子どもたちも熱中していて、2 時間という時間があっという間に終わっていったと感じた。こういった演劇のワークショップには、一つは相手を信用すること、心を解放して自分の好きな動きや仕草をすること、それが故に体の全ての筋肉を緩めてリラックスすることを狙いとしている。そういった効果があったのか、名古屋の子どもたちは「平和ぞうれっしゃ」のシーンを次々にこなし、デバラジが要求する役作りを“自然”と行うことができたと感じた。ワークショップを終えたあと、数人からフィードバックを頂いた。「私の娘の表情がずいぶん明るくなった。たくさんインドの人からもらったから、何か自分も彼らにお返しがしたい、何ができるかな、お母さん。」と質問した娘を持つ母親は、彼女がリストカットを行い家出をして苦しんでいることを教えて下さった。インドの人たちに随分感謝されていたが、彼女自身が解放され始めたのはアートの力であろう。この経験がきっかけで、彼女が明るさを取り戻し、自分を見つめ直す、或は家族を大事にする機会となって欲しいと願う。また、今まで合唱団にいたが歌うことも少なかったと聞いていた全く無表情だと感じた小学生の子も少しずつ溶け、今回歌だけではなく演劇にダンスとフルコースをこなした。その子の表情ががらっと変わったのは誰の目にも明らかであった。インドの人と出会い子どもたちが少しでも変わっていったのを見た私たちであった。ボーンフリーでいつも行なっているアートを通して彼らの姿勢や表情を変えていく、というそれは長くかかることであるが、その試みを日本でも実践した結果となったのだと気づかされた。演劇が、音楽が、ダンスが彼らの心に何らかの変化をもたらし、リラックスさせたのだ。ここでもアートがセラピーとして働くことを実感した日々であった。

３．子どもと若者へのエンパワーメント

どの場所でも子どもたちや若者と一緒に「平和ぞうれっしゃ」を作り上げていく中で、その過程（プロセス）が子どもたちをエンパワー（力づけて）していくことは明らかであった。インドから持ってきたインド人の不思議な力は日本の子どもや若者、おとなを笑顔にさせ、人生でやったことのないことにすんなり入らせたとても魅力的な力だった。

広島のワークショップで禎子をやることになったＭ子ちゃんは「最初は禎子をやるのがとても嫌だったけど、やっていくうちに平和のことを考え、やることが大切だと思った。」と述べたのは小学校 5

年生の子だ。名古屋では素晴らしい小さなアーティストにも出会った。赤木萌絵ちゃんは持っている才能以上のものを発揮した、それは自然と彼女から出てくる表現力とアートに吸い込まれそうになるアーティストとしての彼女であった。何でもやる、挑戦してみる、というポジティブでエネルギー120％の彼女であったが、今回自分はこんなことができるのだ、という再発見が多々あったという。彼女が演じる佐々木禎子とデバラジのトラの役は息が絶妙にあっていた。

東京では若者が率いたキャンプで、そのスタッフと呼んでいたメンバーのパワーにまず圧倒された。昨年話し合いを始めたときは私を含め４名ぐらいだったのが１年後には 40 人という動員ぶり。それに加えて小学生から大学生までいた 30 名の参加者であった。二日間で「平和ぞうれっしゃ」の演劇をこなし三日目に舞台に立つというとても忙しくも挑戦的なプログラムであった。最初から熱気むんむんの中アイスブレーキングがあり、チーム作りに励む行程が成された。それぞれの配役が決まり、練習の段階で、短時間の中今までにない「平和ぞうれっしゃ」が出来上がっていった。それぞれのシーンに対する理解なしではこなせない演劇やダンスもそれぞれが深く理解し、練習に励んだ。「ノーノットアゲィン」のダンスもダンサーはかなり難しいものと感じていたらしかったが、簡単だから 30 分で覚えられるよ、という一言で始めたら、30 分もかからずやりこなした若者たち。それはアーティストとしてのテクニックという問題ではなく、成し遂げたいという情熱が彼らを動かしたのだと思った。個々人が学ぼうと前に出て真剣にやっている姿に私たちチームは心打たれ、このグループは絶対に舞台が出来るという確信を感じた。

東京パフォーマンスの当日は、朝からの舞台チェックとリハーサルがあり時間が押す中本番があっという間にやってきた。最初から誰の気持ちも高揚し、興奮を抑えきれなかった。やっていて自然と涙がでてきた。それはその場のエネルギーと思いとそしてお互いが示す愛情に包まれたものから動かされたものであろう。舞台はあっという間に終わり誰もが信じがたい気持ちであっただろう。こんなにも若い人を感動させるプロセスは他には類を見ないかもしれない。子どもたちに、若い人たちに自分はこんなことができるんだ、という可能性を示し、そして実行した東京で舞台は新しい世代のエンパワーメントであっただろう。

未来

ボーンフリーアートスクールは今年の8月15日をもって日本で7年目を迎えることができた。最初はバンガロールにある私立中学の作業場を借りて路上から来た子どもたち6名で始まった。私たち

は自分たちの永遠の土地を所有することはまだないのだが、これまで行なってきた活動とその理念が子どもたちの中に着実に芽を出してきているように思う。ボーンフリーを「生徒」として卒業した若者たちがボーンフリーの柱を担い、次の世代を育てる段階に来ている。今回来日したアナン・ダナコティ（19 歳）はこの6年間でアート、或はダンスにより自己を確立し、現在夢を抱いて生きている。将来はストリートチルドレンのためのダンスセラピストになること、それが彼の目標だ。現在、20 名いる中で 80％は学校へ行き、そのうち二人が高校へ通う。ボーンフリーを出てアーティストとして活動している若者や結婚して家庭を築いている者もいる。「子どもが子どもを苦難から解放する」、それがボーンフリーの活動の柱だ。ダリット（最下層の人を指す）の子どもたちが教育を受け、知識を付けることで、ハイカーストに支配されるインドの社会にどんどん出て行き、底辺から社会を変えること。最初に述べた変化以上の文化的、社会的「変革」を行なっていくこと、それが児童労働を廃絶していくことにつながっていくであろう。

今回のツアーでよく聞いたのが、「私たち日本人は平和についてインド人に教えられた」ということであった。インド社会で憲法9条を広めることが国内の暴力を抑えること、原爆史を伝えることで核に頼らない国をつくること、それがボーンフリーからのメッセージだ。ヒバクシャが語る過去は将来を見据えた未来平和の予言である。原発に頼らない、放射能に怯えなくてよいはずの社会をつくることが、今の多くの日本の人の願いではないのだろうか。それを感じとった1ヶ月のツアーは今後のボーンフリーの発展にとても大きなステップとなっていくことは間違いない。原爆のことを知らない、佐々木禎子さんのことを知らない世代を生まないためには私たち今の世代がしっかり過去を学び未来を見据えた教育を受けていく必要があると感じる。ボーンフリーアートスクールは新しい子どもたちと若者が担っていくときが来ているのである。

会計

ここで記載する会計報告はボーンフリーアートスクールとしての独立した会計報告である。支出は合計 120069 円、収支は合計 510741 円であった。各地では招聘にあたって各地域で分担金というものが発生しており、それは 5 名分の往復渡航費（1名はエア・インディア社の協力により招待）、5 名分のビザ費用、各地域への移動費、さらに「平和ぞうれっしゃ」日本語用レコーディング費用とデバラジの招聘地事前訪問の費用（2011 年 5 月）（その内の飛行機代の半分はボーンフリーアートスクールが負担）を総計し分割したものである。また、それぞれの招聘地域における実際にかかった費用は各地に負担して頂いた。ここで示す会計報告はそれらの会計とは別であり、ボーンフリーアートスクールでかかった費用と同団体に得られた収入の報告であることを予めご了承頂きたい。

謝意

2011 年招聘に関して沢山の方にご協力頂いたこと、ここに厚く御礼申し上げたい。ボーンフリーアートスクールはたくさんの方に支えられて運営され、子どもたちが教育を受けていることを間近に感じたのはこのツアーであり、この場を借りてお礼を申し上げたい。皆様のお力なしでは、このよう

な大事業を行うことは不可能に近かったと言えるであろう。特に今年は東北大震災があり復興に日本は精力を尽くさなければならない中、インドから6名のアーティストを呼び1ヶ月のイベントを成功させるのには影で見えなかったご尽力があったのは言うまでもない。また各地で助成金を申請したにも関わらず今年はどれも受理されず財政的状況は大変困難を極めた。しかし、個々人の、或は各団体による誠意と努力が実り、各地で期待以上のものを一緒に作り上げ絆を深めることができた。インドと日本の友好はさながら、「平和」という共通目的を持ちそれを伝えて行きたい、という熱望が多くの人を動かしたであろう。ここに心より感謝したい。以下は特筆すべき方のお名前を挙げさせて頂く(敬称略をご了承頂きたい)。

プロダクション制作:

「平和ぞうれっしゃ」脚本・監督・音楽・演出:ジョン・デバラジ/翻訳:中山実生
/原作「ぞうれっしゃがやってきた」:小出隆司
指揮:藤村記一郎(広島、長崎、福岡、名古屋)/振付:中山実生/矢野青剣・唐崎聖子(東京)

「平和ぞうれっしゃ」日本語版作成(2011 年5月) うた:愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団
「サーカスのうた」、「ぞうを売らないで」「ぞうれっしゃよはしれ」「平和とぞうと子どもたち」「メッセージ」
作曲:藤村記一郎、作詞:清水則雄
「平和ぞうれっしゃ」「黒鳥とフラミンゴ」「くまを撃て」「北王と馬」「No Not Again」「ガンジーのうた」
「憲法9条」「Sadako」「大行進」作詞・作曲:ジョン・デバラジ/訳詞:中山実生

宿泊所に関する謝意

宿泊は主に各地お寺で、自炊をすることができたり、豊かな自然に囲まれた場所でくつろぐことができた。また、福岡、大阪、千葉では各ご家庭にお邪魔することになり日本の家庭にもインド人は触れることができたであろう。泊まらせて頂いた方は以下の方々である。岡本法治(広島)、一ノ瀬連優功(長崎)、少年少女みなみ合唱団各関係者(福岡)、日野るり子・ギリ(大阪)、徳林寺(名古屋)、中山寛子(千葉)

実行委員会

実行委員会は各地域により団体であったり個人レベルであったりとまちまちであった。
主催;ボーンフリーアートスクール(インド)/チームピースチャレンジャー(総括)
東京;ボーンフリーアート東京/共催:チームピースチャレンジャー、OLAL(働く子どもの『遺産と伝説』キャンペーン)
名古屋;Peace Elephant Train あいち・2011 全国教育のうたごえ祭典 in あいち・愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団
大阪;ボーンフリーアート大阪プロジェクト実行委員会(代表:阪口史保)/呼びかけ団体;ヒューライツ大阪、大阪府在日外国人教育研究協議会

広島;有志による共同企画(代表:小松真理子)／協力;広島のうたごえ協議会・広島合唱団・あゆみ共同保育園
福岡;ル'セルクル・少年少女合唱団みなみ代表:久保山千可子)
長崎;長崎平和音楽祭実行委員会(長崎のうたごえ協議会・たちばな音楽教室)(代表:片山生子)

ボーンフリーアートスクールの活動

ボーンフリーアートスクール(英語表記;Bornfree Art School)は働く子ども、ストリートチルドレン、債務奴隷の子どもたちを解放する社会運動であり、音楽、ダンス、演劇、彫刻、絵、写真、映画作りなどを通して新しい世界を子どもたちのために生み出すために努力を続けています。インドで日本の憲法 9 条の概念を広げること、ヒロシマ・ナガサキの史実を若い世代に伝えることで暴力の文化をなくし、平和の精神を子どもたちに築き上げることが今必要です。路上で生きる子どもたちこそ平和大使であると私は信じています。ボーンフリーアートスクールの子どもたちは 2008 年バンガロールからラホールに向けて約 3000 キロの自転車の旅ピースバイスクルを行いました。インドとパキスタンの子どもたちが双方の国の平和をもたらすことができるのです。私はアーティストとして子ども時代を失った子どもたちと共にアートを通して社会を変えていきたいと思います。

活動歴

2005 年 8 月 15 日　ボーンフリーアートスクール開校

- 生徒 7 人で始まる。St.ジョーセフ・インディアン中学校の空き部屋を借りてストリートチルドレンのためのアートスクールを開始。

2006 年

- 「世界で一番大きなラブレター～インドからパキスタンの子どもたちへ(The World Largest Love Letter~Dear children of Pakistan, from children of India」
  クリケットスタジアムと同じサイズの絵を書く。インドとパキスタンの子どもたち約 100 万人が平和メッセージを記入。バンガロールからムンバイ、デリー、ワガ国境まで絵は旅をパキスタンの地震被災者に届けられる。
- 「歴史の旅(History Expedtion)」
  児童労働の現場を回りカメラで記録する旅である。ここで述べる歴史とは、権利を奪われ早過ぎるおとな時代に足を踏み入れさせられている働く子ども、債務奴隷の子ども、路上で生きる子どもたちの「今の歴史」である。写真のトレーニングを受けてきたボーンフリーアートスクールの子どもたちが、2006 年カルナタカ州周全土、2007 年タミール・ナドゥ州を回り、同州政府が指摘した 100 種類以上の児童労働現場をカメラで記録した。子ども写真家 25 名は全部で 3 万枚の児童労働の写真を生み出すことになった。本記録は 2007 年国会に提出される。ボーンフリーの子どもたちが国会で議員と国連関係者に対して児童労働問題に

政府機関が取り組むよう訴えった。

- 「歴史の旅」写真展デリーで開催。

2007 年

- 「ピースボート」船上の旅で、シンガポール～インド間の航路で講師（ジョン・デバラジと中山実生）としてワークショップを行う。
- 公立小学校でのアート活動を開始（カルナタカ州政府と協力）。
- 債務児童労働劇「スパルタクスリターンズ」公演。150 人の子どもたちを対象に演劇およびダンス、音楽などのトレーニングを行う。
- 第二回「歴史の旅」タミール・ナドゥ州での児童労働の現場の撮影。
- 児童労働の写真記録が国会へ提出。国連関係者及びインド政府関係者と子どもたちは会合を持つ。法務大臣オスカー・フェルナンデス氏との会合。

2008 年

- パペット劇「ゴンドワナ・ゴンドワナ」公演（グジャラート・アーメダバード市）
- ジョン・デバラジ作原爆劇「白い花」の公演（インド各地）
- 「憲法 9 条世界会議」（千葉開催）にインド代表としてボーンフリーアートスクールより 5 名出席。パフォーマンス、講演を行う。
- 日本の 6 大都市（広島、京都、神奈川、東京、千葉、福島）にて大学および NGO 主催の講演会にて児童労働に関するパフォーマンスとレクチャーを行う。
- コーチン市にてピースボートの「証言の旅」に参加された 101 人の被爆者の方の前で「白い花」を上演。
- 「ピースバイシクル」

ボーンフリーアートスクールは、前代未聞の夢の平和自転車ラリーに出かけた。35 人、そのうちの 3 分の 2 は元児童労働者でありストリートチルドレンである。33 日間、2869 キロ、8 州を自転車で横断。2008 年 11 月 1 日、南インドのバンガロール市内にあるマハトマ・ガンジー銅像の前で Peacebycycle は旗揚げされた。目標は一日 100 キロメートル。目的はひとつ。軍事費を減らし教育費を増やし、インド・パキスタンの友好平和を実現させ、全ての子どもたちの教育の権利を保障する、であった。

2009 年

- 短編映画「チェチェ～チャップリンは帰ってきた」作製
- 長編映画「アナン～喜びの賛歌」撮影開始

2010 年

- ジョン・デバラジ来日講演「平和の鍵は憲法 9 条～児童労働と闘うインドのアーティスト」（千

葉、東京、神奈川、名古屋）

- 「Elli Eddeli」カンナダ CD 発売（ジョン・デバラジ）；ボーンフリーダンスアカデミー初パフォーマンス
- 「アナン～喜びの賛歌」初公開（日本、ドイツ、オランダ、チェコ）
- 「非暴力コミュニケーション」ワークショップ（ドイツにて）に参加（3 名）。
- 「Heiwa Zou Resha～平和ぞうれっしゃ」制作開始。

2011 年

- 東北日本大震災義援金のためのパフォーマンス「白い花」
- 「チャーリー・チャップリン」生誕記念パフォーマンス
- 「平和ぞうれっしゃ」初公演（チェンナイ、バンガロールにて）
- 「平和ぞうれっしゃ」日本ツアー（7月～8月）

ボーンフリーアートスクールを応援しよう！

ボーンフリーアートスクールでは皆さんのサポートを必要としています。

1. ボランティアをしてみたい・・・・いつからでも、どこでも（インドと日本）
   子どもたちにアートや勉強を教えてみたい、ワークショップをしてみたい、スポーツを教えてみたい、一緒に生活して子どもたちのことをもっと知ってみたい・・・などどんな形でもボランティアとして活動に参加できます。
2. もっと本格的に知りたい！ボーンフリーアートスクールの活動を研究テーマに・・・・インターンシップやインタビューを受け付けています。
3. 日本から応援・・・1）教育ファンド募集中（子どもたちの教育を応援します！、2）物資を受け付けています・・・服（夏物も冬物も、男女 10～18 歳）、靴、スポーツ用衣類と用品、カバン、文房具（ペン{青色}、定規、コンパスなど）、アート教材（画用紙、絵の具など）、ダンスの衣装（黒のタイツ、シューズなど）、デジタルカメラ（バッテリーとメモリーカード付き）
4. 一般寄付も受け付けています。
   口座名義；ボーンフリーアートスクール、口座番号；01300-1-56760

平和ぞうれっしゃ日本ツアー2011　収支報告

本会計はボーンフリーアートスクールのみの会計です。

場所	詳細	支出額	総合計
広島	カメラ備品	4097	
	インターネット、FAX、電話代	2743	
	衣装代	2940	
	電気備品	702	
	食費	12648	
	楽器備品	945	
	自転車駐輪代 100 円 X6 台 X2 回	1200	
	備品	1376	
	交通費（タクシー代）	8600	
	資料館入場料	250	
	解説カセットレンタル料	1200	
	新聞代	150	
合計①		36851	36851
長崎	材料費（パフォーマンス用）	2236	
	資料館入場料	1600	
	資料代	500	
	電車代（市内）	720	
	タクシー代	800	
	飲料水代	100	
合計②		5956	5956
福岡	食費	1540	
	スパッツ代	2692	
合計③		4232	4232
大阪	食費	3607	
合計④		3607	3607
名古屋	食費（大阪～名古屋）	1270	
	食費	4566	
	材料費、備品、衣装代	17671	
合計⑤		23507	23507
東京	食費（名古屋～東京）	252	

	食費	1659	
	テレホンカード(国際・国内)	2000	
	インターネット代	1335	
	文房具	1342	
	備品	4148	
	ホテル代	31110	
	タクシー代	1070	
	電車賃	3000	
合計⑥		45916	45916
総合計(①+②+③+④+⑤+⑥)			120069

平和ぞうれっしゃ日本ツアー2011　収入報告

本収入はボーンフリーアートスクールの収入に限ります。

場所	詳細	合計
広島・長崎・福岡・東京(チームピース　チャレンジャーさんによる)	グッズ販売売り上げ	175600
広島	寄付	36767
長崎	個人カンパ	10000
大阪	グッズ売り上げ	3000
	寄付	7497
	個人カンパ	10000
名古屋	グッズ販売売り上げ	104100
	寄付	72667
東京	個人カンパ(最終日ホテル代含む)	41110
	BF 東京カンパ	50000
合計		510741

スケジュール詳細

		内容（午前）	内容（午後）	内容（夜）	観客／参加者数（およそ）
7 月 30 日	インドから大阪、広島		インドから関空着	母親大会（夜「平和ぞうれっしゃ」パフォーマンス）	1000 人
31	広島	平和公園内慰霊塔訪問、碑巡り（三登浩成氏による案内）			
1-Aug		あゆみ保育園訪問（パフォーマンス）	自衛隊博物館見学		50 人
2		アートワークショップ（子ども・若者対象）			40 人
3		アートワークショップ（子ども・若者対象）			40 人
4		平和資料館見学／原水協デモ参加	山岡さんグループにアピール／ピース＆ラブラウンジにてパフォーマンス		50 人
5		広島生協主催「虹の広場」にてリハーサル参加パフォーマンス	パフォーマンス	ピースナイター観戦	1000 人
6		平和式典参列（海外代表）	8・6 国民大行進にてパフォーマンス／原水協平和世界大会出場	灯籠流し／サダコ像の前でのパフォーマンス	
7	長崎	広島から福岡へ移動	少年少女みなみの子どもたちと「平和ぞうれっしゃ」の練習	長崎へ移動	30 人
8		碑巡り（一本柱とクスノキ）／証言聞き	原水禁分科会でパフォーマンス	長崎平和資料館見学 ／核兵器をなくそう女性のつどい 2011in 長崎	100 人／1000 人
9		城山小学校（被爆小学校）見学	長崎市主催平和式典参列	長崎平和音楽祭パフォーマンス「平和ぞうれっしゃ」	500人
10	福岡		リハーサル	「ぞうれっしゃ」平和音楽祭（5 時）	400 人
11			少年少女みなみの子どもたちと「平和ぞうれっしゃ」の練習	大阪へ移動	30 人

12	大阪		ピース大阪見学	ワークショップと交流会	20 人
13		リハーサル	講演会＆パフォーマンス【インドの路上からアートがはこぶ人権と平和のメッセージ】	打ち上げ	100 人
14	名古屋	大阪から名古屋へ移動	徳林寺で打ち合わせ		
15		「平和のための戦争展」資料見学	「平和ぞうれっしゃ」パフォーマンス		100 人
16		演劇・ダンスワークショップ	「平和ぞうれっしゃ」リハーサル with 愛知子どもの平和と幸せを願う合唱団		70 人
17		「平和ぞうれっしゃ」リハーサル with 愛知子どもの平和と幸せを願う合唱団			70 人
18		リハーサル＠東山動物園	動物園見学		
19		教育うたごえ祭典	分科会（ダンス、カレー作り、アートグループ担当）		150 人
20		「平和ぞうれっしゃ」パフォーマンス＠東山動物園		舞台確認・リハーサル	200 人
21		大音楽会	「平和ぞうれっしゃ」パフォーマンス	打ち上げ	1100 人
22	東京	名古屋から東京へ移動		交流会	
23		アートキャンプ開始	アイスブレーキング	「平和ぞうれっしゃ」リハーサル開始	70 人
24		「平和ぞうれっしゃ」リハーサル ・「児童労働」について学び			70 人
25		リハーサル	「平和ぞうれっしゃ」パフォーマンス及びジョン・デバラジとアナン・ダナコティによる講演	打ち上げ	150 人
26		自由行動（池袋・浅草散策）		お別れパーティー＠お台場	30 人
27		帰国			

「平和ぞうれっしゃ」来日者プロフィール

ジョン・デバラジ John Devaraj

ボーンフリーアートスクールのアーティスティック・ディレクター。彫刻家、画家、演劇家、音楽家、映画監督、写真家、ライター、建築家など多岐分野に渡り芸術家として活躍。インドにて 25 年以上、芸術を通して子どものエンパワーメントを目指し児童労働問題に取り組んでいる。また、平和問題、ダリット問題（カースト問題）、女性問題などにも取り組む人権活動家。

2000 年 NY 国連本部にて開催された「子ども兵士会議」や 2004 年フィレンツェで開催された「児童労働世界会議」のアーティスティックダイレクターとしても活躍。

児童労働の現場に踏み込んだドキュメンタリーフィルム「歴史の旅（*History Expedition*）」（2006 年作成）がサンフランシスコ国際ショートフィルムフェスティバルにて選ばれる。

2007 年よりピースボートにてシンガポール～インド間の海路にて児童労働及びアートの役割について講演、パフォーマンス、ワークショップを行う。2008 年にはアーティストとして生きる被爆者の方へのインタビュー及び撮影を行う。現在「平和の預言者（Prophets of Peace）」と題した証言ドキュメンタリーフィルムを制作中。また同年にはバンガロール～ラホール間を自転車で旅する平和サイクルラリーをリードする。インドの子どもたちがパキスタンの子どもたちへ書いた平和メッセージの手紙 7000 通を集めた。

日本の憲法 9 条をインドに広めようとする活動も開始。広島・長崎の原爆をテーマにしたダンス劇「白い花（White Flowers）」を発表（2008 年）。以来、インド 6 大都市にて 50 回以上公演。またバンガロール市、コーチン市、バロダ市に佐々木禎子さんの千羽鶴をイメージした平和モニュメントを制作し、各都市に寄贈した。ボーンフリーアートスクールの創設者。

中山実生（なかやまみおい）

広島市生まれ。幼少の頃より、平和運動に参加する。13 歳での初の海外旅行でアウシ
ュビッツ強制収容所を訪れて以来、10 代でヨーロッパ各地の強制収容所へ旅をする。16 歳のとき、ミュンヘンに 1 年滞在。大学 3 年生時、トルコ移民問題研究でベルリン・フンボルト大学へ留学。2000 年トルコへ旅をしたとき、初めて児童労働者に出会う。それがきっかけで、国際子ども権利センター（東京事務所）でボランティアとして活動。以来 NGO 界で活動。

2001 年ニューヨーク国連本部にて開催された国連子ども特別総会 NGO 代表として出席。2002 年横浜開催「第 3 回子どもの商業的性的搾取に反対する世界大会」若者代表として参加。国際子ども権利センター職員を経て、2002 年 9 月インド・バンガロールへ渡る。2003 年からアーティスト、ジョン・デバラジと写真プロジェクト「働く子どもの遺産と伝説キャンペーン」を開始。働く子どもたちの現状を写真に記録するため、子どもたちに写真のトレーニングを行う。2004 年「自由への翼」ソロ写真展開催（バンガロール、東京、広島）。ジョン・デバラジと共に 2005 年「ボーンフリーアートスクール」設立。以来プロジェクトコーディネーターとして、2009 年より共同代表として活動。2007 年ピースボートにてシンガポール～インド間の講師を務める。2008 年「世界 9 条会議（千葉開催）」にパフォーマーとして参加した後、6 都市の大学や NGO 主催会合にて講演。2010 年第 12 回国際交流奨励賞（中国新聞社）受賞。『内発的発展と教育（新評論出版）』共同執筆。2002 年立教大学社会学部社会学科卒。2010 年インド大学ナショナルロースクールにて「子どもの権利法修士ディプロマコース（Post Graduate Diploma in Child Rights Law）」終了。同年 Attakkalari Centre for Movement Arts にて「Diploma in Movement Arts and Mixed Media」終了。2010 年ボーンフリーダンスアカデミー創設。現在、働く子どもたちのためのダンスセラピストを目指している。「平和ぞうれっしゃ」では、「Black Swan」「Six Children」「No Not Again」の振り付けを行った。

サルワナ・ダナパール　Saravana Dhanapal

幼少時は児童労働の経験を持ち、路上で暮らしていたこともあったが、デバラジとの出会いをきっかけに、パフォーミング・アーティストとして成長。そのキャリアは 10 年以上。7 歳から器械体操、ダンス、フォークダンスなどのトレーニングを受けている。またインドの武道カラリパヤトゥ、ファイヤーダンスのスキルを持つ。デバラジのグループと共に村での小学校「ボーンフリー」建設に関わった。 2003 年働く子どもの遺産と伝説キャンペーン（OLAL；www.olal.net）にも子ども写真家として参加。後、大学にて児童労働に関するソロエキシビションを行う。2004 年債務奴隷に関する劇「スパルタクスリターンズ」で主役スパルタクスを演じた。2004 年グローバルマーチ主催の「世界児童労働会議」（イタリア）にもインド代表として参加。

アートによって社会を変えていくことをめざし、ボーンフリーアートスクールでは立ち上げから活動。現在理事会メンバーの一人。ピースバイシクルではグループを率いたリーダーの一人。2010 年若者のためのインド・スウェーデン文化交流プログラムにてインドとスウェーデンにて福祉活動を行う。2011 年、スペインにて HIV ポジティブ患者のための病院にて福祉活動を半年行う。アートを通して社会活動を行うことを使命とし、ダンス、演劇、音楽、ファイヤーダンスなど幅広く活動を広げる。「平和ぞうれっしゃ」では助監督を務めている。木下サーカス、クマを殺

す狩人、憲法 9 条などのシーンを手がける。St.ジョーセフ大学院にて社会福祉学修士課程終了。

ピア・バングロワラ　Pia Bunglowala

プナ出身。フリーランスダンサー。専門はコンテンポラリーダンス。1 年間のダンスプロフェッショナルコース(Attakkalari Center for the Movements and Mixed Media) にて、インド古典舞踊バラタナティヤム、カラリパヤトゥ、コンテンポラリー、バレエ、ジャズダンスなどを学ぶ。Rythemotion, Nityaritya などインドのコンテンポラリーダンスカンパニーでも活動。ボーンフリーアートスクールには 2011 年より関わりを持ち、チャーリー・チャップリンの誕生日を記念したプログラムで「スマイル」を子どもたちと踊る。以来ボーンフリーとの活動を深め、「平和ぞうれっしゃ」では、子どもたちや大学生へのダンストレーニングを行う。「ぞうを売らないで」の振り付けを行った。ボーンフリーを通して、児童労働問題と平和問題に深く関わるようになる。今回の来日において、爆心地や「平和ぞうれっしゃ」の舞台である東山動物園にてのパフォーマンスの意義を深く受け止め、ダンサーとして、アーティストとして、そして人間として成長していけることを願っている。

ラマチャンドラン・スダライヤンディ　Ramachandran Sudalaiyandi

小学校 6 年生のときより、ジョン・デバラジのグループで音楽、演劇、ダンス、彫刻づくりなどを通して児童労働問題に取り組んできており、現在ボーンフリーアートスクールの理事会のメンバーの一人。ピースバイサイクルでは 35 名のチームを率った一人。ボーンフリーアートスクールでは常に、「縁の下の力持ち」的な存在である。デバラジのミュージックアルバム「Songs of Freedom」「白い花」「平和ぞうれっしゃ」などでパーカッションを担当。特にインドの民族楽器とアフリカの民族楽器ジュンベを専門とする。夢は、社会のために働くアーティストとして活動すること、自分が幼少のころから学んだことを社会へ返していくこと、何も持たない人に分かちうことができる人間でありたいと願っている。「平和ぞうれっしゃ」ではバックステージとライオンに毒を与える飼育係、憲法 9 条の兵士役をやっている。大学では社会学を専攻。国際関係学修士課程に進学を希望。

アナン・ダナコティ Anand Dhanakoti

小学校 5 年生で学校を辞め、父親の借金を返済するため、ココナツを切って売る仕事を始める。3 年ほど仕事をし、2005 年 8 月にボーンフリーアートスクールに参加。最初にボーンフリーに来たときに、鉛筆とノートを渡されたのではなく、楽器を渡されたことがボーンフリーアートスクールに興味を持つきっかけとなった。絵やフルートを学び、2006 年には「歴史の旅」で 5000 枚以上の児童労働の写真を記録に残す。同年、7 年生に再び戻り勉強を再開。2007 年より、St.ジョーセフインディアン中学校に入学。器械体操とジャズダンスを学び始めるのもこの頃。昨年、10 年生を終え、高校へ進学。現在、St.ジョーセフ高校 2 年生（インドの高校は 2 年制）。現在、ボーンフリーダンスアカデミーのファシリテーターとして、子どもたちにダンスを教える傍ら、プロのダンサーよりバレエとジャズを学んでいる。ボーンフリーアートスクールの理事会メンバーの一人。2009 年、初来日。「世界 9 条会議」（千葉開催）参加。また、6 大学で児童労働についての講演も行った。2010 年「非暴力コミュニケーション」をテーマにしたワークショップにも参加（ドイツ）。「平和ぞうれっしゃ」では、黒鳥、シマウマ、サーカスのピロエ、兵士役など様々なシーンで活躍する。将来は、働く子どもたちのためのダンスセラピストとして専門に活動することが夢。

ピースミュージアム「平和への道（Shanthi Path）」Peace Museum 設立に向けて

ジョン・デバラジ

（原文：英語）

はじめに

平和を伝えるため、そして日本国憲法に記された第 9 条の大切さを子どもたちや若者に伝えていくことがとても早急かつ重要であり、その手段として今回「平和ミュージアム」開設のアイデアが思い浮かんだ。「平和ミュージアム」、あるいは「戦争に反対するミュージアム」、あるいは「シャンティパース（平和への道）」と呼ぶこともできるが、戦争の歴史を時間軸に辿るものである。人間の歴史の中において、過去 5000 年のうち 147 年間が平和があったと言われており、残りの年数は殺戮が繰り返されてきた。人間の歴史はすなわち戦争の歴史である。平和ミュージアムでは、第二次世界大戦についてのイメージや情報、ヒロシマ・ナガサキの原爆史とその被害について、またアメリカが起こしたベトナム戦争、カンボジアでのポルポト大虐殺、パキスタン・バングラデッシュ戦争、印中戦争、印パ戦争、そして今も続くインドとパキスタンでのテロとカシミール紛争、宗教間紛争について触れたい。さらに、沖縄にある米軍基地について、パレスチナとイスラエルの紛争についても述べたい。平和をテーマにした、歌、音楽、映画、演劇、ダンスのプレゼンテーションが行われる場所にもしたい。

平和ミュージアムでは平和キャンペーンに参加する人を集め、ボランティアを中心として平和活動を行うことを推進していく。広島平和資料センターが提供する、ピーススタディコース（平和学）とも連動し、インドの若者がヒロシマやナガサキで平和学を学び、バンガロールにある学校機関にて平和学コースを展開することができる人材を育成したい。

平和ミュージアムのオープニング；マハトマ・ガンジーの誕生日である 10 月 2 日

2011 年 10 月 2 日ガンジージャヤンティ（誕生日）に平和ミュージアムを KH カラソウダというアートギャラリーでオープンする予定である。ボーンフリーアートスクールによる「平和ぞうれっしゃ」のパフォーマンスもあわせて行われる。ヒロシマ・ナガサキでの平和学コースに関しての発表も行われる。オープニングの招待状は教育機関や学校の教師、平和活動家、アーティスト、ライター、演劇家などに送られる予定だ。入場は無料であるが、自発的な寄付を期待したい。その寄付は平和ミュージアムを運営するため、子どもたちの教育のため、平和を表現するための芸術表現の活動に使われる予定である。

連絡先

ボーンフリーアートスクール

No.21, 2nd Cross, GH Layout, 3rd Block East, Jayanagar Bangalore 560011 India

Tel;+91-9886306366/9886011830

http://www.bornfreeart.org

http://bornfreeart.blogspot.com, mioinakayama.blogspot.com

Email; admin@bornfreeart.org, mioinakayama@bornfreeart.org

無断で文書の編集・加筆・転載、写真の使用はお断り致します。

All Rights Reserved @ Mioi Nakayama